

アマゾン・ネオ・シャーマニズムの心理過程の現象学的・仏教的研究

石川 勇一 (相模女子大学)*

A phenomenological and Buddhist study of the psychological process in the Amazonian Neo-Shamanism

ISHIKAWA Yuichi

I. はじめに

1. 研究の経緯と目的

筆者は縁あって、ブラジル北西部のアクレ州にある奥アマゾンの原始的な生活をしている村に赴き、シャーマンの執り行う儀式に繰り返し参加し、異次元ともいえる世界を何度も体験することとなった。その体験は筆者に不可逆的で大きな内面的変化をもたらしたが、その内容は言葉で表現できる範疇を超えており、他者に正確に伝達しようとすればただちに困難な壁が立ち上がることを感じざるを得ない。体験に近似する言語をかりうじて選択しながら表現してみたところで、一般常識的な感覚や、通常の心理学／精神医学からすれば、幻覚または虚構として片づけられ、多くの誤解や奇異の目にさらされるであろうことは明白である。

しかしながら、トランスパーソナル心理学の見解に照らすならば、常識では理解しがたいネオ・シャーマニズムによって引き起こされる心理的体験は、超個的な世界空間に意識が到達したときに生じる諸現象が凝縮された典型ですら

ある。ネオ・シャーマニズムによる内的体験は、人それぞれまったく異なる幅広い多様性をもちながら、一方ではさまざまな霊性修行の過程で生じる神秘体験やそれにとまなう困難（いわゆる「宗教体験」）、日常生活の中でも生起しうることが知られるようになったスピリチュアル・エマージェンスやエマージェンシー（Grof, S. & Grof, C. 1989, 1990）、1970年代から本格的に研究されつつある臨死体験の諸特徴（Moody, R. A. 1975, Ring, K. 1980ほか）などと通底する傾向をもつことが、実際に体験してはつきりと理解できるようになった。

このような経緯から、本研究では、第一にアマゾン・ネオ・シャーマニズムの外的概要とこれまでの心理学／精神医学的研究の展望を行い、第二には、ネオ・シャーマニズムの内的心理過程について、ケース・スタディとして現象学的な記述を行い、さらに初期仏教の視点から体験内容を整理し、考察を加えた。これらによって、奥アマゾンにおけるネオ・シャーマニズムの内外の全体像が明確となり、ネオ・シャーマニズム体験の心理的・霊的意義と可能性、そして問題点や課題について総合的に考察することを本稿の目的とする。

* 〒252-0307 神奈川県相模原市南区文京2-1-1 相模女子大学
人間社会学部 人間心理学科
<http://www.sagami-wu.ac.jp/ishikawa/> (石川勇一研究室)
y-ishikawa@isc.sagami-wu.ac.jp

II. アマゾン・ネオ・シャーマニズムの外的概要

2. 地理と歴史

アマゾンでシャーマニズムが発祥した地域は、南米大陸の広大な地域を毛細血管のごとく無数に枝分かれして流れるアマゾン川流域に広がる熱帯雨林地帯であり、現在のブラジル、ベネズエラ、コロンビア、エクアドル、ペルー、ボリビア諸国にまたがり、アマゾニア (amazônia) と総称される領域である。主としてアマゾン上流域周辺に住むアマゾニア土着の先住民社会において、数千年前から独自のシャーマニズム文化が継承されている (山本誠、2012)。

歴史的には、15世紀末から数百年にわたってスペイン、ポルトガル、イギリス、フランスによる征服と植民地化により、アマゾンのシャーマニズムは最大の危機を迎える。大量殺戮、奴隷化、強制労働、感染症の拡大、キリスト教伝道、欧州の価値観の押し付けがなされ、インディオ達の伝統的な文化、宗教、慣習は大打撃を受け、シャーマニズムも含めて大半が根絶やしにされたが、ジャングルの奥地に孤立した部族の間で生き残ったという (Grob, C.S. 1999)。

3. シャーマニズムからネオ・シャーマニズムへ

もうひとつの大きな転機は、黒人のゴム採取労働者であったライムンド・イリネウ・セーハ (Raimundo Irineu Serra, 1892-1971, アフリカ系出身で北ブラジルのマラーニョ maranhao 出生、信者の間ではメストリ・イリネウ、「黒の聖者」と尊称されている) が、女神から啓示を受け、ブラジルのアクレ州にサント・ダイミという教団を1930年代に設立したことである。イリネウ

は、それまでの伝統的な南米のシャーマニズム同様、強力なサイケデリクスであるアヤワスカ (第5節で紹介) を用いる方法を継承しながらも、シャーマンだけが異界に飛翔して、神々の知恵を参加者に伝えるのではなく、参加者全員が直接に神々の世界へと旅立つ儀式の方法を確立したことにその特徴がある。このようなやり方は必ずしもイリネウに限られたものではないが、いわばシャーマン体験を民主化した儀式を教団において定式化したことの意義は大きい。なぜなら、これによって、森に住むインディオのみならず、異教徒たちや、近代教育を受けた異国の人々も含めて、万人にシャーマンの世界への門戸が開かれ、本人が望みさえすれば体験的に検証可能になったからである。それゆえ、サント・ダイミの設立と発展が、アマゾニアのシャーマン文化がジャングルを脱出し、都市部を含むブラジル全土に広がり、さらには全世界へと波及する引き金であり駆動力になったと思われる。

本稿ではこれ以後、サント・ダイミおよびその影響を受けた宗教的活動を、伝統的な先住民のシャーマニズムとは区別して、ネオ・シャーマニズムと呼ぶこととする。ネオ・シャーマニズムとは一般に、たとえばグロフのホロトロピック・プレスワークのような、シャーマニックな変性意識を活用した儀式やセラピーなどを指して用いられる言葉である。アマゾンの先住民族によるシャーマニズムを背景として、サント・ダイミ教団とともに誕生した、参加者全員がシャーマンの世界に参加して体験するという民主的形態の儀式としての、アマゾン・ネオ・シャーマニズムに限定して本稿では論じていく。

今回筆者が滞在し、シャーマンの執り行う儀式に参加した場所は、ブラジル南東部のリオデジャネイロ州郊外の小さな山の中、同国北部のアマゾナス州の州都マナウスから車で4時間ほどの距離にあるジャングルの中、同国北西部に位置するアクレ州の州都リオ・ブラ

ンコ (Rio Branco) から車で約7時間、そしてカヌーに乗り継いで約2時間のところにある小さな村の三カ所である。

最後の小さな村は、サンド・ダイミ教団一派の拠点であるアマゾン奥地のセウ・ド・マピア (Céu do Mapiá) から近いところにあるが、電気・ガス・水道・(車が通れるような) 道路・電波等のインフラが一切存在しない原始的な生活を送っている村であった。寝泊まりする建物もなかったため、筆者らは樹木の間につるしたハンモックで夜を過ごした。

これらの3箇所、繰り返しネオ・シャーマニズムの儀式に参加することができたが、その会場はいずれもサンド・ダイミ教団の教会 (といってもすべてジャングルの中のオープンな施設や森の中の広場) である。

1961年には、同様にアヤワスカを用いる教団ユニオン・ド・ベジエタル (União do Vegetal : UDV) が、ジョゼ・ガブリエル・ダ・コスタ (José Gabriel da Costa、ブラジル北東部のパイア州出身、信者からはメストリ・ガブリエルと尊称される) によって設立された。UDVも70年代にはブラジル全土に広がりを見せ、90年代には欧米にも進出している (中牧、1992)。

そのほか、かつてはサント・ダイミのメンバーであったダニエル・ペレイラ (Daniel Pereira de Mottos、アフリカ系ブラジル人、信者からはメストリ・ダニエルと呼ばれる) が教団を出て、新たな団体バルキーニャ (Barquinha) をやはりアタレ州のリオ・ブランコに設立している。

大本のサント・ダイミ教団においても、1971年に創設者イリネウが死去したことを契機に分裂が起きている。現在、そのなかの最大分派はライムンド・イリネウ・セーハ光の総合センター (Centro Eclético da Fluente Luz Universal Raimundo Irineu Serra : CEFLURIS) であり、パドリーニョ・セバスチャン (Sebastião Mota de Melo) によって1974年にリオ・ブランコに創

設された。

以上のように、アマゾン・ネオ・シャーマニズムの団体は複数に分化し、各地にコミュニティがつくられるなど、複雑で流動的な展開をみせている。一方で、それ以前の伝統的なシャーマニズムも各地で存続している。

4. アマゾン・ネオ・シャーマニズムの6つの特徴

筆者はブラジルの各所において、さまざまなシャーマンが主導するサント・ダイミの儀式に参加し、異なるセッティングやプログラムを体験したが、以下の6つの要素は共通していた。

①**大自然の中で行う。**屋根のある整った会場もあったが、どこも壁に囲まれていない屋外で、深いジャングルの中が会場であった (写真1、2)。広場で火を囲んで行うこともあった。



写真1. 儀式の会場



写真2. 儀式の様子

②**祈り**。はじめにキリストへの祈り、聖母マリアへの祈り、そしてアマゾンの女神ジュラミダンへの祈りが行われる。儀式は祈りに始まり、祈りをもって終わる、厳粛な雰囲気である。排他的な一神教でありながら、アマゾニア土着の女神ジュラミンダンと混交しているのは興味深い。サント・ダイミのシンボルは通常の十字架に、横に一本加わったダブル・クロスである（写真3）。キリスト教の装いでありながら、アマ



写真3. サント・ダイミのダブル・クロス

ゾニアの霊的伝統を受け継いでおり、通常のキリスト教とは異質の特徴を有している。

③**聖なる歌を歌う**。何時間も歌い続ける。ギターやマラカスなどの楽器を演奏する人もいる。この歌はイナリオ（Hinário）と呼ばれ、神を讃える歌である。シャーマンの説明によると「天から受け取る聖歌のこと。歌の音魂で森の女神と同化する意識に神通力が宿る」という（吉野、2011）。特にブラジル人は大きな通る声で歌い続けるので、どのような極限的な意識状態になってもイナリオが全身に響いてくる。

④**身体運動**。会場までジャングルを歩くことに加え、祈りのためにジャングルの中を歩くこともある。イナリオを歌っているときには、簡単なステップをくり返して踊る。数時間の儀式では、かなりの運動量になる。

⑤**瞑想**。儀式の途中で瞑想の時間が入る。儀式中は感覚や感情が平時の数倍以上に感度が高まっており、内外の状況に非常に良く気づく。変性意識状態にあり、異世界へと意識が飛翔することもある。儀式後にも、個々に自然と静かな瞑想状態に入ることもある。

⑥**「神様のお茶」を飲む**。聖餐としていただく。アマゾン・ネオ・シャーマニズムの伝統であり、意識を変性させる強力な作用をもつ。第5節で詳しく述べるが、サント・ダイミのなかでは、このお茶をダイミあるいはハインヤなどと呼ぶが、一般的にはアヤワスカのことである。「神様のお茶」としてのアヤワスカをつくるときも、儀式として丁重に行われ、厳しい重労働ながら、イナリオを歌いながら作業する工程が多いという（吉野、2011）。

6つの共通要素の内、⑥はアマゾン・ネオ・シャーマニズムの特異的な点であるが、残りの①～⑤の5つの共通要素は、世界の霊的諸伝統の修行法に多くが含まれており、トランスパーソナルな修行の普遍的要素であるといえる（石川、2013, 2014, 2015）。たとえば、日本に古来から伝わる山岳修行（修験道）には、歌の代わりに真言、読経、法螺貝の奏上があると考えれば、5つすべての要素を満たしている（石川、2012）

5. アヤワスカ

アマゾンのシャーマンが伝統的に用いてきたアヤワスカ (ayahuasca) とは、現地のケチュア語で「死者の蔓」「魂の蔓」を意味する。地域によってはヤヘ (yagé) とも呼ばれる。アヤワスカの学名はバニステリオプシス・カーピ (banisteriopsis caapi) であり、100メートル以上にまで達することのある巨大な蔓植物である。その硬い樹皮を木槌で打ち砕き、もう一種または数種の植物の葉を混ぜてサンドイッチ状に積み上げ、釜で長時間煮詰めることによって、儀式で用いられる「神様のお茶」が生成される (吉野, 2011)。写真4、5はリオデジャネイロ郊外の、アヤワスカを生成する場所である。



写真4. カーピの蔓を粉碎する場所



写真5. アヤワスカを煮込む場所

もう一種の植物としては、サイコトリア・ヴィリデイス (psychotria viridis、チャクルーナとも呼ばれる) の葉を混ぜる場合が多い (Grob, C.S. 1999)。一般には、混合して煮込まれた飲料をアヤワスカ (ayahuasca) と呼んでいる。

サイコトリア・ヴィリデイス (チャクルーナ) には、意識を変性させる DMT (ジメチルトリプタミン) 成分が含まれている。DMT は、猛烈なビジョンを生み出す作用をもつが、単独で経口摂取しても、胃に自然発生するモノアミン酸化酵素によって不活性化されてしまい、その作用は発揮されない。ところが、バニステリオプシス・カーピを組み合わせて煮込むことにより、そこに含まれているハルマラ・アルカロイドがモノアミン酸化酵素を阻害する作用 (MAOI) をもつため、DMT が活発に吸収されるようになり、中枢神経系に大きな変化を引き起こすのである (Grinspoon, L. & Bakalar, J. 1979, Grob, C.S. 1999)。

DMT の作用は、突然あらわれる激しいものであり、「心をぶっとばす (mind-blowing)」と表現するに相応しく、かつて精神治療薬としての研究が盛んであった LSD の作用とほぼ同一であるが、より強力であることが知られている (Grinspoon, L. & Bakalar, J. 1979)。

サイコトリア・ヴィリデイス (チャクルーナ) に含まれる DMT の主な作用は表1に、バニステリオプシス・カーピに含まれるハルカラ・アルカロイドの作用は表2のとおりである。ただし、双方を混合して生成されたアヤワスカの作用は、DMT とハルカラ・アルカロイドの作用を単純に加算したものではなく、単独摂取にくらべて、より穏やかで持続性が増大し、ビジョンも有機的自然に向けたモチーフが増えるなどの異なった特徴が生じることが知られている (McKenna, T., 1992)。

アヤワスカは薬物中毒のリハビリに有効であることも知られている。ペルーのタラポトに

表1. DMTの作用 (Grinspoon, L. & Bakalar, J. 1979をもとに作成)

<p>【身体的作用】 散瞳、深部反射の亢進、心拍数・血圧・体温の上昇、目眩や吐き気、悪寒、疼き、振戦、深い呼吸、食欲不振、不眠など。どれも必ず現れるわけではなく、逆の兆候が現れることもあり、幅広い兆候が現れる。</p>
<p>【精神的作用】 輝くような強烈な刺激がもたらされる、美への反応が高まる、色彩が鮮烈になる、音は深い情感を帯び、空間的位置に特別な意味を見出す、深い知覚が先鋭化する。 身体意識が著しく高まる、感触が変化する、時間は遅く感じられるか停止する。 閉眼で鮮明な像、幾何学模様、風景、建造物、生命あるもの、象徴的な物体を見る。 被暗示性が高まる、感情が誇張される、日常では経験することがない強さと純粋さをもつ。愛、感謝、喜び、共感、欲望、怒り、痛み、恐怖、絶望、孤独感がきわめて強力になる。隠されていた両義的な感情がすべてあらわになる。 思考とビジョンが次々と頭に浮かぶ。ものがその形態を失い奔放に揺れ動くリズムの中に溶解する感覚、別の宇宙に移動し逗留しているかのような体験が訪れる。</p>

表2. ハルカラ・アルカロイドの作用 (Grinspoon, L. & Bakalar, J. 1979をもとに作成)

<p>【身体的作用】 吐き気、嘔吐、発汗、目眩、倦怠感、震え、痺れ感、筋肉の弛緩。</p>
<p>【精神的作用】 夢幻イメージを伴うトランス状態になる、開眼でイメージが展開する、閉眼で鮮明なイメージが映画のように続く、宙づりや飛翔するような感覚、身体の内側に落下する感覚、死を体験しているような感覚が起こる。自分の考えにふけることを願い、他人とコミュニケーションをもちたがらなくなる。</p>

は1992年に「タキワシ」(takiwasi) という薬物依存者向けの施設が設立され、コカイン、アヘン系薬物、アルコール、ニコチン中毒者のリハビリとしてアヤワスカが儀礼と共に行われている (Mabit et al, 1995, 山本誠, 2012)。また、宗教的文脈以外でも、アヤワスカは原産地では万能薬と考えられ、浄化用下剤として用いられれば腸内寄生虫駆除に有効であるとされている (McKenna, T., 1992)。

6. メディスン・マンの超合理的な知恵

ところで、欧米流の教育を受けた近代人からすれば、科学的知識も実験道具ももたない先住民族が如何にして、星の数ほどある植物の中からたった二つの植物を選び出し、絶妙な組み合わせで特殊な生成方法まで知りえたのか、合理的な説明することは困難であり、謎とされている。

無数の天然薬の知識をもつメディスン・マンでもあるシャーマンに、さまざまな薬物の生成法について現地で尋ねたところ、アヤワスカに限らず、「植物の場所、生成の仕方、使用法は、精

霊や女神が直接教えてくれる」のだという。アクレ州の村に滞在したとき、シャーマンはコパイバ・マリマリとよばれる聖なる樹木の樹液を紹介し、傷や腫れなどに良く効き、さらに魔を祓う力がある万能の薬であると薦めてくれた。実際に共にジャングルを4,5時間歩いて、聖木から樹液をとって小瓶に一杯をいただいた (写真6)。

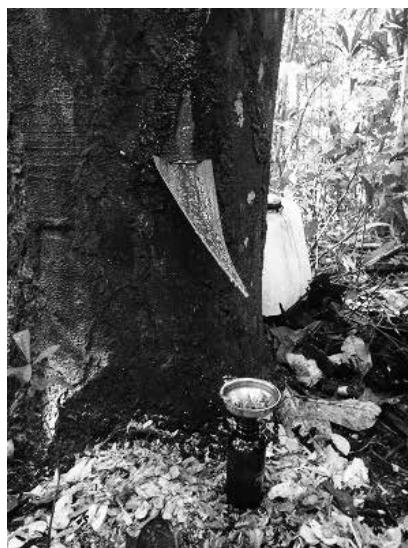


写真6. コパイバ・マリマリの樹液採取

その時、「決してこの木の場所を他人に教えてはならない」と念を押されたのが印象に残っている。実際は、深いジャングルの中なので、筆者が一人でもう一度行くことは明らかに不可能なのであるが、欧米人などに知られると、薬剤だけを摂取し、木が切り倒され、森が焼き払われてしまうのだという。

その他にもシャーマンからさまざまなオイ

ルや天然の薬をいただいたお陰か、電気・ガス・水道・トイレのない原始の村で裸足で過ごし、赤くドロツと濁った奥アマゾン川で沐浴する生活をして、病気にかかることもなく、虫に刺されることもほとんどなく、心身共に健康に過ごすことができた。(写真7)

7. サイケデリクスを巡る議論

「神様のお茶」「ダイミ」などと呼ばれるアヤワスカは、もっとも強力な作用をもつサイケデリクス (psychedelics) の一つとして医学的に認知されている。そもそもサイケデリクスとは、ギリシア語の *psychē* (精神, 魂) + *dēlos* (目にみえる, 明らかな) の合成語であり、語源的には「魂を顕現させる」という意味である (Grinspoon, L. & Bakalar, J. 1979)。

現在我が国では、医学をはじめとする多くの学術的文献において、サイケデリクスは「幻覚剤」と訳されているが、語源的な意味とはむしろ正反対で、否定的な価値判断が含まれた訳語である。精神展開剤という訳の方が中立的であるが、あまり一般的ではないため、本稿ではサ



写真7. 特殊な蛙の粘液を火で焼いた肌にすり込むと免疫力が向上するという

イケデリクスとカタカナ表記で著すことにする。

サイケデリクスの定義としては、この分野で膨大な研究を行っている精神医学者のグリーンズプーンと法学者のパカラーによると、「サイケデリック・ドラッグとは、身体的な耽溺や依存、身体的に大きな障害、あるいは譫妄、失見当識、健忘を引き起こすことなく、思考、気分、知覚に多かれ少なかれ確実な変化を生じさせる薬物であり、夢や瞑想や宗教体験で得られる恍惚、不意に浮かぶ記憶イメージの閃光、それに急性精神病で引き起こされる体験以外では、通常得られない変化を生じさせる薬物」である (Grinspoon, L. & Bakalar, J. 1979)。

表3にまとめたとおり、サイケデリクスには英語でもさまざまな別称がある。その背景には、サイケデリクスによって引き起こされる心身の状態や影響に対する価値判断が多様に、しかも肯定と否定の両極端にまで分裂し、かみ合わない議論が展開されているという事情がある。

表3. サイケデリクスとその主な別称（Grinspoon, L. & Bakalar, J. 1979を参考に筆者が作成）

別称	邦訳例	価値判断	備考（意味や意図など）
psychedelics	精神展開剤 幻覚剤	中立的 否定的	精神科医ハンフリー・オズモンドが1956年に価値評価から離れた用語として提唱。ギリシア語のpsychē（心、魂）とdelos（明るい、はっきり見える）の合成語とされる。
psychotomimetic	精神異常発現物質	否定的	精神病に似た状態を引き起こす物質であるとして、これらの鎮圧を意図している。
hallucinogen	幻覚剤	否定的	ラテン語の気が狂うことが語源。
psychodysleptic	精神変容物質	中立的	欧州やラテンアメリカで一般的な用語。
phantastica	幻想物質	肯定的	詩的な響きをもつ用語。精神薬理学者ルートウィヒ・レビンが命名。アルバート・ホフマンとリチャード・シュルツが支持。
entheogen	エンセオジェン	肯定的	民族植物学者や宗教学者のグループが提唱。ギリシア語のen（内に）theo（神）gen（生じる）を合成した造語で、「自分の内に神をみる」「内面に神性を生み出す」の意。

サイケデリクスを宗教的な文脈で用いるシャーマニズムや、心理療法を促進するために用いる精神医学的治療（psycholytic therapy）という状況においては、多くのシャーマン、修行者、信者、精神科医、患者等が関わっているが、彼らのうちで、サイケデリクスによって生じるビジョン、知覚、思考、感情、記憶、身体感覚のすべてが無意味な幻覚だと思っている人はほとんど皆無であろう。サイケデリクスによってなんらかの真実に接近できると考え、むしろ現実の方が幻覚に近いと悟る人さえ少なくない。

一方で、サイケデリクスの知識がない人や、知識はあっても体験のない人、快楽や現実逃避の道具としてのみサイケデリクスに関心がある人たちにとっては、サイケデリクスによって生じるビジョンは無意味な幻覚、あるいは退屈しのぎの娯楽でしかないことが多いだろう。

このような両極端な状況にあるため、サイケデリクスに関しては、肯定派と否定派の間でしばしば感情的な議論に陥るのである。サイケデリクスの議論を建設的に行うためには、外的な科学的知識と、体験に基づく科学的・現象学的・一人称的な検証をバランスよく行うことによっ

てのみ、その真の姿が見えてくると思われる。

8. シャーマニズム体験の主要要因はセットとセッティング

本研究の後半は、ネオ・シャーマニズムの内的体験を現象学的に掘り下げてゆくこととするが、その際に留意すべき重要なことは、サイケデリクスが一つの要因となっていることは疑い得ないものの、その体験内容すべてを薬理作用によって説明したり、還元することはできないということである。

サイケデリクスを契機とした体験は、驚くほど幅広く、豊富で多彩である。グリーンズプーンとバカラーは、「いわゆる『サイケデリック作用』とか『サイケデリック状態』といった独自のものはない。ある人がLSDを使ったといっても、その人が夢を見たという程度にしか、体験の内容や意味について知ることはできない」と端的に表現している（Grinspoon, L. & Bakalar, J. 1979）。

したがって、アヤワスカを摂取したということ自体は、夢を見たというのと同様に、ひとりひとり、毎回異なるし、受け止め方も異なるので、体験内容に対してはさしたる意味を持たない。

では、なにが体験を方向づけるのかといえば、セットとセッティングである (Bravo, G. & Grob, C. 1996)。セットとはシャーマニズムに参加する態度や動機のことである。真摯な求道的な動機をもっているのか、治療のためなのか、それとも単なる好奇心なのか、現実逃避が目的なのか、どれだけ心の準備が整っているのか、どれほど真実の理解力があるのか、これらの諸々の内的な姿勢や状態が体験に与える影響はきわめて甚大である。

一方セッティングとは、儀式的場所、時間、プログラムの構造、ルール、風土、文化的・宗教的背景、シャーマン、参加者、シャーマンや参加者の経験、知性、情緒、性格、健康状態、信念、霊性、(神々や精霊たち)、などきわめて多岐にわたる諸状況である。

適切なセットとセッティングがあつて、はじめてサイケデリクスは有用な要素として役立つが、準備を整えずに興味本位に使用すれば、パニックやバッドトリップ、深刻な心身の事故を引き起こしかねないのである。

本稿では、第3節で述べたとおり、ネオ・シャーマニズムの心理過程に限定して論じていくが、同じサント・ダイミ教団内の儀式においても、シャーマンの経験や気質、配慮、儀式的進行方法によって、参加者の体験はまったく異なるものになってしまうことを経験した。セッティングは、同一教団だからといって、同一のものでは決してなく、多岐にわたっている。

セッティングは、第4節で述べたネオ・シャーマニズムの6つの特徴に加えて、数多くの要因が参加者の体験に影響を与えている。そしてなによりも、本人の動機と心がまえ(セット)が、非常に大きな因子となるのである。

このようにネオ・シャーマニズムの内的体験は、セットとセッティングという無数の要素のつながりのなかで、仏教的に言えば縁起の只中で生じる現象として理解しなければ、その本質

を見誤ることになる。

宗教学者の正木晃(2002)が「宗教体験にサイケデリック体験は不可欠だが、サイケデリック体験だけでは宗教体験にはなりえない」と述べているのは、このことを端的に表現している。

9. アマゾン・ネオ・シャーマニズムの心理学的研究の展望

アマゾン・ネオ・シャーマニズムに関する今日までの心理学/精神医学的研究を展望するならば、はじめに言及すべきはオアスカ・プロジェクト(The Hoasca Project)である。オアスカとはアヤワスカのポルトガル語の音訳である。

1993年、ブラジルのアマゾン流域の都市マナウスにおいて、UDVの協力を得て、オアスカ(アヤワスカ)の効果に関する多国籍的・学際的な共同研究が着手された(Grob, C. S.; McKenna, D. J.; Callaway, J. C.; Brito, G. S.; Neves, E. S.; Oberlaender, G.; Saide, O. L.; Labigalini, E.; Tacla, C.; Miranda, C. T.; Strassman, R. J.; Boone, K. B., 1996)。この研究では、UDVに所属してアヤワスカを摂取している15名のメンバーと、アヤワスカを摂取したことの無い15名の統制群に対する長期的な心理学的アセスメントが行われた。両グループに対し、構造化された精神医学的診断面接と、パーソナリティテスト、神経心理学的な評価を行い、さらにアヤワスカ宗教のグループには、変性意識体験の現象学的アセスメント、ライフヒストリーに関する半構造化面接を行っている。

その結果、アヤワスカを摂取したグループには、精神病理の寛解がみられた。注目すべきは、教会に入信する前には、アルコール飲歴73%、暴力を伴う飲酒33%、刺激性物質の乱用27%、タバコ依存が53%にみられたが、アヤワスカを用いた儀式に定期的に参加した被験者すべてが解決されていた。過去に煩っていた鬱病、不安障害も改善が見られた。

パーソナリティ・テストの結果は、アヤワスカの儀式参加者と、統制群では大きな違いがみられた。儀式に定期的に参加したUDVのメンバーは、新奇さの探求、内省的、厳格さ、誠実さ、ストイック、平静さ、質素、秩序、我慢強さ、社会適合性、情緒的成熟などの面で、統制群に比べて高いスコアが認められた。その他、儀式参加者は、自信がある、リラックス、楽天的、のんき、非抑制的、外交的、精力的な特徴も認められ、集中力や短期記憶の指標も有意に高かった。

以上から、オアスカ・プロジェクトによって、アヤワスカを用いた宗教的儀式への定期的な参加によって、精神病理的症状の改善や、健康なパーソナリティと優れた神経心理学的機能を発揮する状態になることが示唆されたのである。

尚、第5節で述べたとおり、儀式で飲用されるアヤワスカにはDMT（ジメチルトリプタミン）成分が含まれており、DMTは国際的にスケジュールI薬物に指定され、所持や使用が禁止されているが、ブラジル政府は、宗教的実践の場であればアヤワスカの使用は合法であると1987年に公式に認定したため、これらの研究もすべて合法的になされたものであることを付言しておきたい。

Barbosaら(2005)は、宗教組織であるUDVとサント・ダイミにおいて、はじめてアヤワスカを用いた儀式に参加した人々への心理アセスメントを行った。サントダイミ19名、UDV9名に対して、儀式の4日前と2週間後に調査を行った。事前の調査では、半構造化面接と精神医学的尺度を用いて、メンタルヘルスの状態をアセスメントした。事後の調査で、再びメンタルヘルスの状態をアセスメントし、変性意識状態(ASC)において現象学的なインタビューも行っている。

その結果、さまざまなビジョン、ヌミノース体験、平安さ、洞察、ひどい苦しみの体験等が

目立って報告された。サント・ダイミのグループにおいては、精神医学的症状の有意な減弱がみられ、サントダイミとUDVの両グループの被験者において、アサーティブで、静穏で、快活で、喜びが増大するという変化がみられた。

Barbosaら(2009)の類似する研究では、サント・ダイミ15名とUDV8名の計23名の被験者が、アヤワスカを用いた宗教的儀式を体験する前と体験の6ヶ月後に、精神医学的症状、パーソナリティ、QOLについてのアセスメントを行った。

その結果、サントダイミの被験者は、精神医学的症状の改善、メンタルヘルスの向上、より自信があり楽観的な態度への変化が見られた。UDVの被験者では、身体の痛みの緩和、より自立する態度への変化が見られた。

Kjellgrenら(2009)は、アヤワスカを用いたグループセッションに参加した北欧の25人によるその体験の記述を経験的・現象学的・心理学的に分析し、その結果を次の6つのテーマに集約した。①動機と目的、②恐れの状態、③体験の突然の変容、④超越的体験にともなう無限定に拡大された状態、⑤影響、⑥世界観の変化と人生への新しい方向性、である。その分析の結果、参加者は多くのテーマにおいて肯定的な心理学的・身体的な改善がみられ、アヤワスカを用いたセッションは新しい医学やセラピーとして発展する興味深い可能性がある結論を下している。

Bousoら(2012)は、宗教儀式において繰り返しアヤワスカを摂取することによって心理的状态、メンタルヘルス、認知にどのような影響を与えるかを調べるために、パーソナリティ、精神病理、人生への態度、神経心理学的機能の調査を行った。定期的に儀式においてアヤワスカを摂取するメンバー127名と、アヤワスカを用いない宗教に活発に参加している統制群115名を対象とし、はじめと、一年後に調査している。

その結果、アヤワスカ宗教の参加者群には、すべての精神病理学的な尺度においてより好ましいスコアを示したほか、自己超越がより高い指標を示し、有害な回避行動や有害な自己管理では低スコアを示した。人生への態度としては、スピリチュアルな指向性、人生に対する意味、心理社会的福祉においてより高いスコアを示した。一年後のフォローアップにおいてもこの差は維持されていた。アヤワスカ宗教者群において、心理的な不適応やメンタルヘルスの悪化、認知的な障害が生じたというエビデンスは見いだせなかった。

Halpern ら (2008) は、米国最高裁判決では、宗教的なアヤワスカの使用は認められることが示されたが、アヤワスカのアメリカ人への健康の影響はほとんど知られていないという背景から、以下のような調査を行った。サントダイミの一流派に属する米国人メンバー 32 人に対して、身体検査、ドラッグの使用歴、人口統計的情報や宗教への参加等に関するインタビュー、さまざまな心理学的尺度等でアセスメントを行った。

その結果、身体検査では健康な被験者であることが明らかになり、メンバーは心身の健康はアヤワスカによる効果であると考えていた。19 名の被験者は以前に精神医学的障害をもつ時期があったが、そのうち 6 名は部分的に寛解し、13 名は完全に治癒しており、8 名は教会への参加によって治癒されたと述べた。24 名の被験者は、アルコールまたは薬物の乱用や依存歴をもっていたが、そのうち 22 名は完全寛解し、5 名は教会への参加が回復へのターニングポイントになったと述べた。以上から、アメリカ人においても、アヤワスカを用いる宗教への参加によって、肯定的影響が見出されることが明らかになった。

ブラジルの Da Silveira ら (Da Silveira, Dartiu Xavier; Grob, Charles S.; de Rios, Marlene Dobkin;

Lopez, Enrique; Alonso, Luisa K.; Tacla, Cristiane; Doering-Silveira, Evelyn, 2005) は、アヤワスカを用いる宗教に所属している 40 名の青年期のブラジル人と、彼らと性別、年齢、教育的背景、精神病理学的兆候がほぼ一致する 40 名の統制群に対して、鬱、不安、アルコール摂取の習慣、注意力の問題等の精神医学的なスクリーニング調査を実施した。その結果、アヤワスカを用いる宗教に定期的に参加している青年たちは、統制群と比べて、鬱、不安、アルコール摂取の習慣、注意力の問題の頻度が低いことがわかった。

そのほか、Gable と Robert (2007) は、宗教的儀式においてアヤワスカを用いる人々へのインタビューを行い、その結果、宗教的儀式における DMT の服用は比較的安全であり、依存性や心理的混乱のリスクも最小限のものであると結論を下している。

以上のように、アヤワスカを用いるアマゾン・ネオ・シャーマニズムの先行研究を展望すると、宗教的文脈で儀式に参加する人々には、共通して肯定的な心理学的効果、精神病理学的な治癒効果、身体的効果が見出されている。

10. ネオ・シャーマニズム体験への本質へと迫る一人称的・現象学的アプローチの意義

ここまで、アマゾン・ネオ・シャーマニズムの外的概要、そして心理学／精神医学領域の先行研究や議論を概観してきたが、これによって理解できるのはネオ・シャーマニズムの外縁までである。本研究は、これらの知見をベースとしながら、研究者自らがシャーマンの世界へと飛び込み、その内的体験世界へと直接的に参入し、その中核へと現象学的に迫ろうとする試みである。

このような一人称的に試みは、筆者の知る限り、我が国の学術論文には皆無である。人類学者の蛭川氏の著作『精神の星座：内宇宙飛行士の迷走録』（2011）には自身の内的体験が詳し

く紹介されているほか、アングラの雑誌や書籍、ネット上のブログなどにも体験談が日本語でも散見できる。ただし、いずれも一般向けの読み物である。

なぜ、我が国ではネオ・シャーマニズムという文化現象が人類学の研究対象とはなっても、その内的体験が心理学や精神医学等の学術研究の対象とならないのだろうか。それは、サイケデリクスを十把一絡げに危険なドラッグとしてしか認識がなく、宗教的あるいは心理治療的な文脈における肯定的な作用や可能性については意識を向けようとしなないという背景が第一に推察される。第二に、日本の心理臨床は共感や配慮が強調され、母性原理が強すぎるとの指摘が各所でなされるのを耳にするが、サイケデリックな作用というのはこれと対極にある父性的原理の力であることが考えられる。すなわち、サイケデリクスを用いれば、有無を言わせぬ力で内面にある葛藤を暴露し直面化させ、さらには常識的な認識の外にある現実が否応なしに降りかかってくることから、この父性的な強力さが、母性的な日本の心理臨床の世界からは本能的に拒否されているとも推測できるのである。サイケデリクスの強力な固定観念を打ち破る父性的な強さは、多くの精神治療者や研究者などの専門家にも、無意識のうちに嫌悪や恐怖・不安を引き起こすということも考えられる。

このように推測される状況下で、現象学的事例に基づくネオ・シャーマニズムを日本語で学術研究として扱うことの意義は大きいと思われる。東洋や先住民文化のもつ深層心理あるいは靈的智慧を見直しことにもつながるし、サイケデリクスの問題点と可能性の実際をバランスよく評価することにもつながるからである。

ただし、このような一人称的・現象学的なアプローチには、いうまでもなく方法論的な陥穽がある。強烈な体験に飲み込まれ、主観的・恣意的になりすぎるといった危険性である。この危

険性に対しては、以下の諸条件が、一定程度の歯止めとして機能すると主張したい。

第一に、アマゾンの強烈なネオ・シャーマニズム体験から本稿執筆時までにはすでに3年以上の年月が経過し、この間は一切同様の体験をしていないため、時間的にも、地理的にも、心理的にも、十分な冷却期間をおいており、冷静に体験を振り返ることができる。もちろん、冷却期間として3年が十分かどうかは議論の余地があるが、少なくとも、一定の距離をおいたということは事実である。

第二に、筆者（研究者）は、約二十年に渡って臨床心理学、トランスパーソナル心理学等を研究している専門家であり、多様な学問的視点をもちうる。

第三は、筆者（研究者）は、約二十年に渡って心理療法を継続的に実践している臨床心理士であり、つねにクライアントの濃密な主観的世界（ときには病的な妄想世界も含む）に接しながらも、「関与しながらの観察」という標語であらわされるような態度、すなわち主観的世界への間主観的・共感的理解と、そこを離れた客観的な視点からの観察という二重性を常に保つ訓練を十分に積んでいる。

第四は、筆者（研究者）は、十年以上に渡って諸々のソマティックス（身体技法）や瞑想修行を行っており、非日常的な体験と日常的な体験の双方を行き来しながら常に自らの身体と心を観察し、統合する努力を続けていること。

第五に、文化的・思想的にまったく異なる視点をもつ初期仏教の経典を参照して、体験内容を理解しようとする事。

以上の五点によって、ネオ・シャーマニズムの内的体験を主観に偏りすぎることなく、中立的で冷静な視点を保ちつつ探求できる可能性を一定程度担保できると考えられる。このような五つの礎となる条件に支えられることにより、常識が通用しないシャーマンの内的世界を、あ

らゆる予断を捨てて、フッサール (Husserl, E. 1850) が述べた意味での本来の現象学的な視点で観察、記述し、本質直観へと深めることが、可能性として開かれるのである。

この方法は、三人称的な自然科学的研究や、インタビューなどによる二人称的研究では手の届かなかった、体験世界への無媒介的な一人称的アプローチである。ネオ・シャーマニズムの世界は、「自分で直接体験しないと結局はわからない」というのは紛れもない事実である。すなわち、外側からみた理解と、身を投じて体験的に内側から理解することの間には、天地の差がある。

ネオ・シャーマニズムの外的研究と、実際にその世界に自らを投入してよく観察することの間には、たとえるならば、地図やガイドブックで旅の情報を得るのと、実際に旅に出て現地を自らの足で歩いてみることの間には、匹敵するか、それ以上の隔絶がある。それゆえ、ネオ・シャーマニズム体験の本質的な理解のためには、本研究のような直接参入による一人称的アプローチが、もっとも自然な唯一の方法であり、探求の王道であり、十分な意義と可能性があるといっていよう。

Ⅲ. アマゾン・ネオ・シャーマニズムの内的体験とその後

奥アマゾンのジャングルでは地理的、風土的文化的な意味で日本とはなにもかも異なっているが、それ以上に、心理的、霊的な意味で日常と遠く隔たった体験の連続であった。そのなかから、特に強い印象を受け、後々まで影響を与えた3つの体験をピックアップし、現象学的に記すこととする。3つの体験とは、地獄・絶望・懺悔の体験、憑依・脱魂・天界の体験、瞑想・洞察・精霊の体験である。さらに、ネオ・シャーマニズム体験後の日常復帰、日常生活との統合

のプロセスについても簡略に記しておいた。スピリチュアル・エマージェンスや臨死体験と同様、非日常的な神秘体験は、見過ごされがちであるが事後の過程がより重要であり、困難を伴う場合も少なくないからである。尚、内的体験の描写においては、主語を「筆者」ではなく、一人称代名詞の「私」として記述することとする。

11. 地獄体験

その時のセレモニーは、日没後に始まった。キャンプファイヤーのように中心に薪を組んで火が灯された。はじめに祈りの時間があり、そのとき私は「本物のシャーマンの世界を教えてください」と心を込めて祈った。これが後に取り返しのつかない事態を招くこととなる。

祈りの後、「神様のお茶」をいただき、火の周りで輪になってイナリオを歌い、ステップを踏んでいた。しばらくは気分良く踊っていたが、あるとき突然に変化がやってきた。それまで心地よかつたイナリオの歌声が、急に身体に突き刺ささってくるように感じられたのである。あまりの痛みでその場にいらなくなり、グループの輪から外れて、森の中で独りになった。

視界は変容し、上も下もわからない流動する万華鏡的世界の中で平衡感覚が失われた。重力の失われたエネルギーの大海原に投げ出されたような感じであった。やっとのことで身体を動かすとそれに合わせて頭の上や手足の先から伸びているサトル・エネルギーがグワンと動くのが見え、自分の身体の内と外を分ける境界が曖昧になった。

世界は無境界のエネルギーの海なのだと思心するのもつかの間に、苦しい感情が内側から次々と湧いてきて、胸が強く締め付けられた。身体が重苦しくなり、背中をまっすぐに立てておくことができなくなった。独りでは歩けない状態に陥り、動転しながら木の根や草を握って地べたを這いつくばった。嘔吐したい衝動に

駆られて口を開けたが嘔吐はできなかった。そうかと思うと口がもう開かないというくらいに大きく開けられ、低い声の嗚咽、泣き声がどろどろとはき出された。泥と落ち葉にまみれながら感情的な嘔吐が続いた。深い悲しみ、絶望感、苦しみ、怒りが次から次へとわき上がり、息もできないほどに苦しく、のたうち回った。耐えがたい苦痛に圧倒され、絶望し、「神様助けて」と叫んだ。しかしなにも変わりはしなかった。何度か絶叫した。私は神に助けを乞うことしかできない哀れな乞食であった。

私の中に僅かに残っていた正常な意識は、地べたに這って化け物のような醜い形相で唸り叫んでる自分自身を観察していた。私は完全に精神病患者、狂人そのものだ、ああ私は壊れてしまったと思った。精神病患者はこのような苦しい世界にいるのだなという専門家的な視点ももっていた。

私の惨めな姿を見たシャーマンが、ゆっくり私の方に近づいてきて、「これはシャーマンが皆通る道なんだ。私も同じように体験してきた」と語り、ハグしてくれた。狂人となった私は有り難くて仕方なくなり、「ありがとう、ありがとう」といってシャーマンに撓垂れついた。しかし、やがてシャーマンは去り、また独り苦しみの世界に落ちた。「シャーマンの世界を教えてください」などと祈ってしまったことが、これほどの苦しみにつながるとは予想だにせず、出口の見えない世界に放り込まれ、文字通り途方に暮れた。

あまりの苦しみのために、ここから逃れるために死んでしまいたいと思ったが、死んだところでこの苦しみは終わらないとなぜかすぐにはわかった。時間が止まっているように感じられ、一瞬一瞬存在していること自体が苦痛であり、絶望した。地球の裏側のジャングルの中で、自分は狂人になって人生を閉じるのだと思った。そうしたら、日本での親しい人々、お世話になった人々の顔が浮かび、無謀な旅に出て人生を終

えてしまい申し訳ない、恥ずかしいという思いになった。

すると、過去の場面が次々とリアルなヴィジョンとなって見え始めた。どのヴィジョンも、私が過去に他者に対して悪意をもったり、悪意のある言葉や拒否的な態度をぶつける場面であった。生まれてから現在までの、子どもだった時の些細な場面も次々と連続して去来した。すべての経験は一つ残らずどこかに記録されているのだと驚嘆した。私のなしたことは、なにひとつ隠すことはできない、すべては行動だけではなく心の中まで見通され、記憶されているのだと思った。

場面をただ視覚的にみているだけでなかった。私の汚れた心、自己中心的な心がありありと胸に感じられ、同時にその態度や言葉によって相手が受けたダメージも増幅されて自分の感情として感じ取ってしまう不思議な体験であった。私は耐え難くなり、地面に頭をすりつけて「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい」と何度も声に出して謝罪した。自分こそ、悪魔の頭であったのだ。だから正当にも、こうして今、地獄に落とされ、自分の悪業を逐一証拠として見せられているのだと思った。心の底から声を出して涙を流して必死になって懺悔した。

数十分謝り続けた頃だろうか、身体と心が急に軽くなり、周囲が明るくなった。「赦された！」そう思った。永遠にも感じられた地獄から解放された。

地獄から脱出してすぐに思った。この体験が、シャーマンの世界を知るために必要だったのだ。神は祈りに答えて下さったのだ。心の底に溜まっていた否定的な感情を浄化し、悪業を自覚して懺悔すること、徹底的に謙虚になること、心の汚れを浄めること、これを一気に濃縮して体験したのであった。自分の悪業ばかりを編集して走馬燈のようにみせられるのは、あきらかに何らかの知的な意図があり、それは神の意図

だと私は解釈した。本来ならば、死んだ後に体験すべき人生の総括を、生きながらにして女神ジュラミダンがイニシエートして下さったのだろうと考えた。重たい感情と悪業で固められた私の自我を、神の慈悲の鉄槌で打ち砕き、粉々に粉碎していただいた。死にたいほどに辛かったが、それを体験して通過した今、本当に心と体が軽くなった。

感謝の思いが溢れてきて、私はずっと立ちあがり、声に出して神に祈った。「これこそ私が望んでいたことです。ありがとうございます。」そうすると、シンプルなフレーズの歌が降りてきて、輪の中心に歩き出し、大きな声で歌い始めた。普段は音痴で引っ込み思案な性格なので、通常であればあり得ない行動である。「私が歌うのか？」と他人事のように観察している意識も同居していた。しかしその時は有り難いという思いと喜びで一杯で、降りてきた歌をステップを踏みながら歌った。視界には、人間は映らず、輪の真ん中で燃える火と、空に浮かぶ月と星、そして精霊たちだけが見えていた。他のメンバーにぶつかったり、椅子に躓いて何度か転倒したが、すぐに足が勝手に起き上がって勢いよくステップを踏み出した。歌を歌うと、精霊達が笑って祝福してくれた。

シャーマン、森、精霊たち、一緒に歌っている仲間達、これまでお世話になった人たちに表現しようのない深い感謝と慈しみの念が湧いてきた。ふと周囲をみると、先ほどまでの私のように、苦しみの世界に落ち込んでしまって激しく泣き続けているいるメンバーがいた。私は自分のことのようにその人を一生懸命励ましているうちに、だんだんと日常的な意識へと戻ってきた。

翌日シャーマンにきくと、私はすごい勢いで歌って踊っていて、真ん中の火に突っ込んでしまわないかと心配して見守っていて下さったとのことである。

12. 憑依・脱魂と天界体験

次は、地獄体験から何度か別のセレモニーを経験し、次第に慣れてきた頃の体験である。このときはお茶をいただいた後、小高い山の中に入り、それぞれが好きな場所で祈り、ふたたび会場に戻り、椅子に座って皆でイナリオを歌っていたときのことである。

その日は、シャーマンの友人が亡くなったということで、イナリオの曲の間でシャーマンが悲しげな追悼の言葉を語っていた。私は、その言葉をシャーマンが語る前から、なにを語るのかがわかるような奇妙な感覚だった。シャーマンが語っているのか自分が語っているのかよくわからないくらい、情緒的にも言語的にも一体感を感じていたのである。その後、イナリオに合わせて、私の身体が大きく勝手に動き始めた。両足が開いたり閉じたり、首が大きく円運動したり、腕や肩がぐるぐる回されたり、自分ではそうしようと思っていないのに、大きな身体運動が自動的に起こることを興味深く観察していた。強い意志で止めようと思えばおそらく止められたが、心地よかったので動くままにまかせていた。

すると、これまでの儀式で何度か見かけていた、人間の背丈近くもある大きな鳥が私の周囲を舞い始めた。この鳥は実在する鳥ではないが、実際の鳥以上に存在感がある。名前はわからないが、神話に出てくる鳳凰かフェニックスのような霊鳥である。今回はずいぶん近くまで寄ってくるなと思った瞬間、なんとその鳥が私の中に入ってしまった。鳥が私の中に入ると、私の身体と心は半分その鳥になってしまった。私にはつやのある大きく立派なくちばしがあった。胸には豊かな羽毛が生えていた。この鳥は、非常に誇り高い心の持ち主であった。私がいままで自分自身には感じたことのないような堂々たる威厳を、自分のこととして内面に感じた。

次の瞬間、ふたたび身体が勝手に動き出し、首が後ろに倒され、口が大きく開けられた。「脱魂するんだ」と思った。不安がよぎった。脱魂してしまったら、この身体に再び戻ってこられるだろうか。やはりアマゾンで私の人生は終わってしまうのではないか。そのとき、私はシャーマンの隣の席に座っていたが、シャーマンのやや悲しげだがしっかりとしたイナリオの歌声が全身に響いていた。「このシャーマンはとても信頼できるし、彼の歌声がきこえている限り、私は大丈夫に違いない。」そう思った瞬間、鳥と共に私は口を脱出して急上昇した。不思議な空間を飛翔しながらさまざまな興味深い風景（ビジョン）を見た後、最後に到着したのは、強烈に揺れ動くまばゆい光を放つ、神々しく美しい城であった。しばらくすると、また別のまばゆい光を放つ宮殿に到着した。これまで見たことのないような言語を絶する美しさに圧倒されているうちに、気がつくやうに儀式が終わり、会場で座っている自分がいた。

しばらく放心状態で、現実の感覚を取り戻せないでいた。しかしとてもすがすがしく、落ち着いていて、深い喜びに満たされていた。会場から移動した後に、この体験をシャーマンに話すと、「鳥に案内されたのは吉兆だ。もう輝く城に到達したのか、それは我々シャーマンが集う場所なのだ。それについてはエルドラド伝説に記載されていて、……」といろいろ教えてくれた。その晩、シャーマンは私のところに来て、「あなたのエゴを大切に。あなたはプシュー（指で天に昇るしぐさ）だから」と笑顔で声を掛けて下さった。

13. 瞑想による無常の洞察と精霊たち

三つ目の体験は、帰国が近づいたある日の儀式が終わった後の体験である。セレモニーを終えて、心身がとても軽やかで満ち足りた気分だった。すでに深夜だったが、独りでジャング

ルの中の開けた場所に行き、満天の星空の下、倒木に腰掛けていた。ジャングルすべての生命が愛おしく、そして自分のすべてを受け入れてくれていると感じ、ジャングル全体と直接つながっているかのような強い一体感に満たされた。「アマゾンの女神ジュラミダンよ、日本から来た私を暖かく受け入れてくれてありがとう、素晴らしいシャーマンの世界を見せてくれてありがとう、日本に戻っても、いつでも今のように全身で愛と感謝に溢れた感じを取り戻せますように」と祈った。「神は愛なり、愛は神なり、いつも神のような意識で生きよう。神に背を向けた世界が地獄なのだ」と思った。心は喜びに満たされ、穏やかな気分になり、目を閉じて瞑想していた。

すると突然、静寂が破られ、目の前に大きな山が現れた。「須弥山だ」と思った。須弥山は極彩色の鮮やかな多色光で輝き、その光は一定でなく、つねに変化して動いていた。それを見て、「あの大きな須弥山さえも転変している。すべては変化する、無常なのだ、私も同じだ、死んだとしても終わりではなく、これからも変化しながら生きることが続くのだ。ハア。」私は無常という現実、死は終わりでないことを雷が落ちるように悟った気分になった。

その瞬間、一斉に周囲から、「ゲラゲラゲラ、ヒーヒッヒッヒ」と大爆笑の音が聞こえた。「折角、私が無常を悟ったというのに、爆笑するとは何事か」と怪訝に思って周りを見渡すと、小さな精霊達が笑い転げている。彼らに意識を向けると、私を馬鹿にしているのではなく、明るく祝福してくれているのだとわかった。「アマゾンでは精霊もラテン系で陽気なのかな」と思い、そのまましばらく座っていた。

精霊達が消えると、私はおもむろに、ジャングルへの感謝の気持ちを込めて日本語で覚えたイナリオを歌い始めた。すると今度は、ブーンという換気扇が回るような電気音が身体の内側

から聞こえたかと思うと、再び小さな精霊達が現れ、イナリオに合わせて輪になって踊ってくれた。丁度、儀式で輪になって踊るのと似ていた。儀式で輪になって踊るのは、私たちが精霊をまねているのかもしれないと思った。

14. ネオ・シャーマニズム体験後の心理過程

帰国の日になり、シャーマンや村民、メンバーに別れの挨拶をしてカヌーに乗り込み、奥アマゾンの村を一人で出発した。船、車、国内線・国外線の飛行機を乗り継いで、およそ4日かけて日本に到着した。帰国後、声がかすれて出にくくなったため、診療所で受診したところ、急激な環境変化による気管支炎だろうと診断されたが、10日間ほどで症状は治まった。アマゾンでのネオ・シャーマニズム体験については、理解ある親しい知人を除いては、語ることはしなかった。語ったところで、伝わるはずがないからである。このような、共有が著しく困難な世界を体験したことにより、他人とのコミュニケーションが煩わしくなり、心因的に声が出にくくなったのかもしれない。

ジャングルの中で異次元の世界に浸っていた人間が、突如都会に出てアスファルトやコンクリート、エアコンや電子機器に囲まれて生活し、仕事をするとなると、やはり相当な違和感と戸惑いがあった。それでも仕事中は、なんとか自分に鞭打って責任を果たす行動を取ることができたが、仕事の合間や、独りでいるときに、すぐに異次元の感覚が蘇ってきた。現実の方が影の薄く、頼りない仮想現実であるかのように感じた。ネオ・シャーマニズムにおける世界の方が、鮮明で、意味深く、活力があり、真実に近く、はるかに現実味を帯びていた。日数が立つにつれ、日常意識がより長い時間く中心を占めるようになり、意識のギャップは次第に解消されていった。しかし同時にそれは、真実から遠のき、愛と感謝に満ちた一体感も消え失せ、自

然や生命と分断された蒙昧な仮想現実（一般の人々が言う現実）に呑み込まれてしまう恐怖感と焦燥感を伴っていた。筆者の場合、この葛藤は青年期から一貫して感じていたテーマであるが、アマゾン・ネオ・シャーマニズムを体験して、その葛藤はより一層先鋭化されたのである。ジャングルのコミュニティに適応することに比べて、日本社会に再適応することの方が厭わしかった。しかし、アマゾンは気軽に行ける場所というわけでもなく、再び長旅をして儀式に参加しようという考えも湧かなかった。

その後、さまざまな縁がつながり、初期仏教に惹かれた。初期仏教の経典を読むと、アマゾンでの体験が、非常にうまく整理が付くことに気がつき、のめり込んでいった。帰国して一年半後には上座部仏教の国ミャンマーへ赴いて、僧院で短期出家して、集中的に瞑想する機会を得た。それは、戒律を守り、毎日8時間以上の集中型瞑想を行う、徹底した修行生活であった。ネオ・シャーマニズムやアヤワスカがなくとも、真実の世界へと近づけることを身をもって明らかにしたいという思いもあった。結果、相当の努力を要したが、その目的は期待以上に果たされた。もちろん、修行はまだ途上であるが、ダンマ（釈迦の説いた真理）の学習と瞑想修行によって、世俗に埋没することなく、煩惱によるものを煩惱によるものと知りながら、真実の世界との接点を失うことなく生きる実践的な道を見出した。これは、霊的成長を求めるすべての人に必要な道であるが、異次元を垣間見て、人間の日常的現実がひとつの頼りない現実でしかないことを知った人間にとっては、より一層切実な課題なのである。

15. 初期仏教からの理解：餓鬼界と兜率天

初期仏教を学び始めると、アマゾンでの体験は、まったく異なる時代・風土・宗教・文化であるにもかかわらず、仏陀の説かれたダンマと

見事に一致し、ダンマを体験的に学ぶためにアマゾンに行ってきたのではないかとさえ思えることすらあった。

あるとき、ミャンマーの指導比丘にアマゾンでの体験を報告する機会があった。比丘は、筆者が目撃したまばゆい光で輝く城や宮殿のある世界は、兜率天であると説いた。兜率天 (tusita) とは、原始仏教によると、世界を構成する三界（無色界、色界、欲界）の最下位の欲界のなかの上から三番目に位置する天界のことである。欲界は、上から順に、他化自在天、楽変化天、兜率天、夜摩天、三十三天、四大王天、人（間）界、阿修羅界、餓鬼界、畜生界、地獄から構成されている。アビダンマ（論蔵）によれば、兜率とは「喜び (tusa) に赴いた (ita)」を意味し、「いつでも喜びを感じずる世界」が兜率天であり（水野, 2013）、仏教修行者が多く転生する世界と説明されている。

さらに、筆者が当時地獄だと思っていた世界も、原始仏典をひもといてみると、地獄の説明とは異なっており、むしろ餓鬼世界であることがわかった。たとえば、『癡慧地経』(Balapandita Sutta MN129: 中部経典第一二九経) においては、「人が刀で三百回刺され、そのせいで苦しみを味わうなどということは、地獄のそれには比べようがありません。何分の一にもあたりません。」等の釈迦による説法があるが、筆者の体験は、それほどまでに苦しい世界ではなかったのである。一方、アビダンマ（論蔵）によれば、餓鬼 (petti) とは、「悪臭を放ち、裸体で、色黒くやせ衰え、血筋が現れ、唇が突き出た醜い姿をしており、常に飢渴に苦しめられ、吐き捨てられた汚物、唾、鼻汁、痰、流れ落ちた血などを食ひ、森・山・川・墓地などを住処とする死霊」であるという（水野, 2013）。筆者の儀式における一時的な精神病的錯乱体験は、この記述のイメージと重なる部分があるように思われた。さらに、『餓鬼事経』(Peta-vatthu

KN7: 小部経典第七経) を開くと、餓鬼のなかには、自分がなぜ餓鬼界に落ちたのかを理解したり、どうやって餓鬼界から脱出しようかと考える者がいるのに対し、地獄ではより強烈な苦しみに絶えず襲われるのでそこに落ちた由来やそこからの脱出法を考える余裕すらまったくないということである（藤本, 2007）。筆者が精神病的錯乱状態に陥って苦しんだときには、それに完全に埋没することはなく、自分の状況を冷静に観察し続け、考える余裕もあったので、地獄界ではなく、餓鬼界に落ちたのだと思われる。また、これほどの錯乱状態にあっても、意識を失うこと無く、観察者が存在し続けたということは驚くべきことであり、気づき (sati, mindfulness) が保たれたことが救いでもあった。

このように原始経典に照らしてみると、アマゾン・シャーマニズムで筆者が体験した異界は、地獄ではなく餓鬼界、霊的な鳥に導かれた天界は欲界の三番目の兜率天であったと思われるのである。人生の中でもっとも苦しい体験であった世界よりもさらに苦しい世界（地獄）があること、同様に人生の中でもっとも美しく喜びに満たされた世界も、まだ欲界の中でしかないことを仏典を通して学ぶと、あらためて世界の広大さに驚嘆したのである。

16. シャーマニズム体験の効果

以上、三つのシャーマニズム体験とその後の心理過程について、現象学的に記述し、一部は初期仏教的な解釈を加えて綴ってきた。これらの体験から得たものは数多いが、主要な事項を集約するとすれば、初期仏教的視点も参照しつつ、以下のようにまとめることができる。

第一は、自らの悪業を因とする餓鬼世界に落ち、悪業の想起と直面化（走馬燈体験）、耐えがたい苦しみのなかでの繰り返した謝罪（懺悔体験）から、業と業果 (kamma-vipāka) は厳然として存在し、餓鬼界は存在し、業の自覚による

懺悔は必要であり、悪業の業果はまさに畏れるに足るものであるということを知ったことである。実際に、餓鬼体験をして、悪業はひとつとして見逃されることなく、やがてその結果を身に受けること、そしてそれはまったく耐えがたいものであることを思い知らされたのである。私たちは、自他の目は欺くことができても、それとは無関係にすべての身口意の行為が業となり、余すことなく業果としていずれ実を結び、それを引き受けなければならない。それ故、筆者が餓鬼世界体験から得たものは、業と業果の感得、それに伴う慚愧の心、すなわち悪をなすことを心底から恥じ (hiri) 畏れる (ottappa) 心が刻印づけられたことである。

第二は、自我の死と再生である。自らの悪業が細部にわたって暴かれ、面前にありありと提示され、汚れた自我の行いを心から懺悔したことである。自我の慢心、狡猾、プライドはことごとく粉碎され、業の法則の下で、神の面前で、「私」という自我がなすすべなく殺されたこと。自我の死によって、汚れを落としたより大きな自己として新たに立つことができたといえるだろう。サイケデリックの語意通り、魂の顕現と表現すべきプロセスである。自我が容赦なく打ち砕かれたことにより、真の謙虚さとは何かをあらためて学ぶことができ、心身が軽くなった。多大な苦痛を伴うプロセスであったが、後から振り返れば、シャーマニズム一般にしばしば生起する死と再生のイニシエーションであり、霊的成長に必須の一過程であったと思われる。

第三は、求道の仲間達を得て、純粋な感謝と連帯感を感じたことである。特にイナリオは、連帯感や一体感を媒介する重要な役割を担っている。餓鬼体験に突入する時に、歌声が身体に突き刺さってきたということは、聖なるものと相容れない邪悪な心が私の中で炙り出され、浄化される過程だったのだと思われる。いわば治療時の薬の苦さのようなものである。また、脱魂

しそうになったとき、帰還できなくなる恐怖を感じながらも、結局流れに身をゆだねて天界へ飛翔することができたのも、つねにシャーマンやメンバーのイナリオの歌声がしっかりと聞こえていたからである。このような仲間達の聖なる歌がなければ、餓鬼界にしても天界にしても、普通の人間にとっては異次元の旅は危険である。異界の旅を熟知したシャーマンと、ともに聖なる意志をもって歌う仲間の存在のありがたさを痛感したのである。シャーマンの度量によって、参加者の体験内容は大きく変わることも実感した。

そして、仲間は人間だけではない。ジャングル全体=女神、憑依して天界に導いてくれた大きな霊的鳥、諸々の精霊たちがともに儀式に参加し、参加者たちを導き、サポートしてくれていることが随所で感じられた。歌に合わせて輪になって踊る精霊たちもいた。筆者の場合は、大きな鳥が憑依して、脱魂を導き、天界 (兜率天) を案内してくれたおかげで、異界の一部をありありと垣間見ることができた。この体験は、単なる驚きであるだけでなく、心を清らかにし、善業を積んで死亡すれば、後にこのような天界に転生するであろうというある種の実感を伴う手がかりを得た。人間界以外の存在と交流し、友人となれたことの喜びは大きい。

仏教的に言えば、人間も精霊も神々も含め、これらの仲間はすべて共に真実 (dhamma) を探求する得がたい法友 (kalyāṇa-mitta) である。

第四は、縁起 (paccayo) の深い理解である。ジャングル、女神、シャーマン、メンバー、大地がひとつとなって、「私」もその一部に融解したような一体感である。自と他、内と外、これらの区別は知的な分別によるかりそめのものにすぎず、実際はすべてはつながりあい、影響し合い、依存し合い、切れ目のないひとつの連続体、命であることを実感するのである。ジャングルが包み込む一つの大きな命のことを、インディオ達は女神ジュラミダンと呼んでいるのではない

だろうか。「私」もこの大きなジャングル、女神ジュラミダンの一部である分け御霊であると感じられると、心地よく安らかな気持ちになるのであった。

仏教的にいうと、縁起（paccayo）の世界を看取して、独立した「私」などどこにもないという無我（anatta）の自覚を得たといえる。

以上の四つが、筆者が奥アマゾンのシャーマニズムを体験して得たことの骨子である。四つは別々の事柄というよりも、一つの体験の四つの側面でもある。また、以上の四つは、現在も豊かに心の財産として生き続けており、振り返ればいつでも感謝の念が溢れる記憶として統合されている。

視座を臨床心理学的に移して述べるならば、アマゾン・ネオ・シャーマニズムの体験は、まず心理療法的効果として、強力な感情の浄化の効果がある。

靈性修行という視座からいうと、自我の悪業の自覚、懺悔、業と業果の感得、死と再生、謙虚さの学び、多次元世界（餓鬼界と兜率天）の体験、多次元世界の法友（シャーマン、儀式のメンバー、ジャングル、神々、靈的鳥、精霊たち）との親交、縁起と無我の感得など、顕著に豊かな成果をもたらしたといえるだろう。書物を通じた知的な学習ではなく、原始のジャングルの中でこのような諸々の悟りが生々しい実体験として起きることが大きな特徴である。

一方で、否定的と思われる影響は、現時点で振り返るかぎり、一切なかったといえる。餓鬼界に墜ちた時は死を願うほどの苦しみを味わい、絶望感とショックを体験したが、それはシャーマン達が訪れている異世界を自らも知るために、汚れを落として靈的成長をするために欠かせない貴重な「自我の死」の体験であった。

帰国後に、日常生活との齟齬を感じ、一時的に体調を崩したが、これも意味のある違和感であった。この違和感こそが、日常性に埋没する

ことなく、求道の正しい道を見いだす原動力となり、筆者の場合には原始仏教に開眼することにつながり、次の修行へと向かわせたのである。日常と非日常の葛藤は靈的な視点からすれば正常なものであり、重要な好影響の一つといえるだろう。

しかし、アマゾン・ネオ・シャーマニズムへの参加を他者に勧めたいかと問われれば、正直なところ、そのような気持ちにはなれない。なぜなら、まず第一に、奥アマゾンに行くというだけでも、かなり大変であるし、いろいろなリスクが伴う。第二に、終わってみて振り返ればよかったといえるにしても、その心理過程は、あまりにも負荷が大きい。体験は人それぞれ異なるとはいえ、気軽に勧められるようなものでは決してない。心と身体が十分に準備ができ、真摯な求道的な動機があり、周囲が制止しても行きたいという人には、自己責任でどうぞ、くれぐれも気をつけて下さいと伝えたいのみである。

17. ネオ・シャーマニズムと初期仏教をつなぐ勝義諦

一般的に言えば、アマゾン発祥のネオ・シャーマニズムを含むシャーマンの伝統と、初期仏教とでは、歴史的にほとんど接点のない異文化の宗教であり、その思想的相違点を挙げればきりが無い。修行の方法論としても両者はむしろ対極に位置している。アマゾン・ネオ・シャーマニズムにおいては、信仰の歌と踊りのなかで、拡大された意識においてビジョンを見、神々や精霊等と交わり、増幅された感覚や感情をいやというほど味わうなど、いわば有と動がその特徴といえる。

一方、初期仏教では、ビジョンをみてもそれに意識を向けること無く瞑想に励み（サマタ瞑想修行の場合）、歌や踊り、意識を醗酵させるものを摂取することも戒律で一切禁じられている（不歌舞觀聽戒、不飲酒戒）。釈迦が多くの

比丘に指導を行った瞑想法である出入息随念のなかには、『『身体の活動を鎮めながら息を吸おう』と練習する』『『心の活動を鎮めながら息を吸おう』と練習する』（『出入息観』Ānāpānasati Sutta MN118：中部経典第一一八経）という一節があるように、初期仏教の修行の基本は、身体、呼吸、心を徹底的に鎮静化することである。身体、感受、心を鎮め、観察する止観行を終えた人には、『『無常を観察しながら息を吸おう』と練習』（出典同上）するなどの課題を与え、身心が無常であり、苦であり、無我であること（三相：ti-lakkhaṇa）を自ら確認させ、それによって離欲、滅尽、放棄を促す。いわば、初期仏教の教えは、静と無がその特徴であり、それによって厭離（nibbidā）と離欲（virāga）によって解脱に至ることを目標としている。

これほどまでに思想も修行法も異なる両伝統をつなぐ、普遍的な場とはどのようなものだろうか。釈迦の説法は、人間や神々が共に知っている、あるいは世間が認めている事柄から始まり、やがて煩惱を滅した境地からみた智慧による法の実相へと移行するという構成が多い。前者は、時代・文化・慣習・学問等が真実と認めている現実であるが、移ろいやすい相対的な事象であり、世俗諦（sammatī dhamma）と呼ばれる。一方後者は、究極的な意識からみた絶対的な真実であり、勝義諦（paramattha dhamma）と呼ばれる。勝義諦は、すべての世間（loka、有為の三界、欲界、色界、無色界のこと）と出世間（lokuttara、世間を超越した無為の涅槃のこと）を貫く変化することのない真実である。勝義諦は、信じて終わるべきものではなく、無智と貪欲と瞋恚の煩惱を取り除き、止観行によって、各自によって確認（証悟）されるものであるとされる。仏教が智慧の宗教であるとされるのは、信仰、思想、文化、時代とは無関係に存在する勝義諦をあらゆる事象において看破することを説くからであり、トランスパーソナ

ル心理学の追求する普遍性もこれと通底するはずである。

表層に横たわる物語やコンテクスト以前の生の体験においては、いかなる伝統における修行体験であったとしても、釈迦の法が普遍的である限り、いたるところで見いだせるのはむしろ当然なのである。本稿において、アマゾン・ネオ・シャーマニズムの体験が、初期仏教の法によって見事に整理されたのは、勝義諦であるがゆえの普遍性がその根拠になっているのである。

IV. おわりに

18. 心の準備と学習効果

以上、アマゾン・ネオ・シャーマニズムの外的概要と先行研究を展望し、一人称的・現象学的・初期仏教的に内的体験を検討してきた。最後に、一般的なレベルでいくつかの考察を加えることとする。

一事例から導かれたネオ・シャーマニズム体験の成果は、いうまでもなくそのまま一般化することは不可能である。ましてアヤワスカを飲めば皆このような体験をするということはまったく示唆していない。既述のように、ネオ・シャーマニズムの体験は、セットとセッティングの無数の要素によって決定されるため、たとえ同じ儀式に同じ回数参加したとしても、他の人はそれぞれ異なる体験と教訓を得るのである。

トランスパーソナル学の代表的な精神医学者であるロジャー・ウォルシュは、向精神性薬物と神秘体験の関係についての研究を展望した上で、次のように結論している。「薬物は、特定の人々に、特定の状況において、たしかに真性の神秘的体験を引き起こし得る。しかし、準備のできた心においては、それはより起こりやすく、持続的効果も生みやすい」（Walsh, R. 1990）。

これは、あらゆる心理療法や修行に通底する知見であろう。どれだけ心の準備があり、どれだけ真理への理解があり、真摯な動機や態度があるかどうかによって、ネオ・シャーマニズム、心理療法、修行の体験内容や成果は、百八十度変わる可能性がある。

ウォルシュは「修行や専門技術が増えてくると、シャーマンは外的な援助にあまり頼らなくてもいいようになる」とも述べている（Walsh, R. 1990）。これはサイケデリクスの逆耐性（繰り返し用いることによって少量でも作用が起こるようになること）と同様の機序であり、多次元世界への意識の拡大は、修行によって学習可能であるということを示している。

それゆえ、ネオ・シャーマニズムの経験を積み重ねることによって、儀式的セッティングがなくとも、あるいは減少させても、多次元的な世界へアクセスができるようになり、いかなる場所においてもシャーマニズムの世界、すなわち多次元的な世界を自在に生き、体験し、勝義諦を目撃しうる可能性を示唆している。

19. アマゾン・ネオ・シャーマニズムの心理療法的効果と危険性

心理療法的な効果についていえば、さまざまなセラピーを学び、体験し、実践した筆者の経験に照らせば、アマゾン・ネオ・シャーマニズムほど強烈なものを他に知らない。数年間の集中的な心理療法を受けてもなかなか直面することが難しいような深層の深い葛藤、恐怖、トラウマ、怒り、執着、条件付け、心の性癖（仏教でいう行 Saṅkhara）が、それが青年期、思春期、児童期、幼少期、出生期、胎児期、過去生に由来するものであれ、怒濤のように浮かび上がり、炙り出され、押し寄せて直面化させられ、浄化されいく。

これは著しい苦痛を伴うが、そのプロセスは過ぎ去っていくものとして観察可能である。そ

れは強力なカタルシスであり、自分の心のシャドーへのあるがままの認識を促し、プロセスを終わらせることにつながる。これは筆者だけが体験したことではなく、繰り返しアマゾン・ネオ・シャーマニズムの儀式に参加している人ならば、ほとんど皆体験して知っていることである。長年参加しているあるメンバーは、「少しでも思い上がったりするとセレモニーでガツンとやられ、大変なことになる」と語っていた。あるシャーマンは、「人間誰もが深い悲しみを抱えている」と述べていたが、心の実際を深く知るものの言葉であると思われた。

このように、深い心理的葛藤を解消するために、アマゾン・ネオ・シャーマニズムは、癒やしと自覚を促す、強力なインパクトをもった心理療法的効果をもつとあってよいように思われる。ただし、あまりに強力で、大きな心理的・身体的負荷がかかるため、セットとセッティングが整った状況下で行うことが必須条件であるように思う。

サイケデリクスの研究者であり精神医学者であるブラヴォーとグロブは、「幻覚剤は、治療的に使われたときはまれであるが、素因のある人たちには精神病を引き起こすこともある」（Bravo, G. & Grob, C. 1996）と注意を喚起している。かつてサイケデリクスを用いる精神医学的治療（Psycholytic Therapy）が許可されていた時代に、LSD等を処方する治療経験を豊富にもつ精神科医の加藤清は、治療の有効性を報告しつつも、「正常者はサイケデリック体験を十分に消化し自らの癒やしの体験とする力をもっている。しかし神経症者では多くの場合その力はない」としている。さらに「精神分裂病者のサイケデリック体験では、個人の生前からの宿業（カルマ）が賦活され、その人の個人的なコンプレクス（感情複合）の解消だけでは収まらないで、治療過程が収斂してゆく癒やしの方向に向かわず、かえって反治療的に治療を拡

散し悪化させる困難な例が多かった。したがって精神分裂病者に対しては、結局サイケデリック体験を避けることになった」と述べている(加藤清, 2002)。

サイコリティック治療は、ネオ・シャーマニズムの宗教的文脈に比べると、自然環境、祈り、瞑想、身体の運動、聖なる歌など、第4節で指摘した霊性修行の普遍的共通要素が欠落し、人工的なセッティングになっているため、同列には論じることはできないが、参考にすべき重要な見解である。

かつて精神病状態で入院歴のある女性が、数十人と共にアヤワスカを1回摂取したところ、中毒精神病に陥った1症例を報告もある(江崎真我, 梅野充, 五味潤隆志, 2010)。アマゾン・ネオ・シャーマニズムのセッティングとは異なると思われるが、精神的健康度の低い人や、心の準備のできていない人の参加には、事前にそのリスクを説明し、専門家の判断を仰いでから参加するなど、慎重な配慮が必要ではないかと思われる。

20. 霊的成長への効果

アマゾン・ネオ・シャーマニズムの効果は、今回の事例においては、心理療法的な感情の浄化にとどまらず、悪業の自覚、懺悔、業と業果の感得、縁起と無我の感得、死と再生のイニシエーション、多次元世界(餓鬼界と兜率天)の体験、多次元世界の法友(シャーマン、儀式的メンバー、ジャングル、神々、霊的鳥、精霊たち)との親交など、霊的成長を促す豊かで濃い成果がみられた。

一般的には、これと同様の体験をすることもしないことも、これ以外の体験することもしないこともあるだろう。しかし、この一事例をもってしても、霊的な突破(spiritual break through)ともいえる成長が促進される可能性がアマゾン・ネオ・シャーマニズムに内包されていること

が明らかにされたといえる。

物質中心な唯物的世界観を抱いている人にとっては、異次元の体験など、幻覚に他ならないという解釈になるだろうが、幻覚であるか否かに関わらず、重要なことは、アマゾン・ネオ・シャーマニズムの体験者の多くには、結果として豊かな心理的・霊的な癒やし・成長・悟りが深まることが数多く報告され、実証されているということである。

21. 結語

以上論じてきたように、事例においては、死と再生をふくむ極限的なプロセスを通過し、その内的体験から、深層を癒やし、自覚し、懺悔し、業と業果を感得し、縁起と無我の感得し、異界(餓鬼界と兜率天)が存在すること、天地における法友との一体感と感謝を覚え、初期仏教でいう勝義諦(paramattha dhamma)を体験的に発見し、事後もその体験が豊かに活かされ続けていることが報告された。

事例報告と多くの先行研究の展望と総合して、アマゾン・ネオ・シャーマニズムは、心の準備の整った人々にとって、適切な宗教的環境が整っていれば、きわめて強力な豊かな心理療法的効果と霊的成長への効果をもつ、貴重な伝統であるといえる。

文献

- Barbosa et al. (2005) Altered states of consciousness and short-term psychological after-effects induced by the first time ritual use of ayahuasca in an urban context in Brazil. *J Psychoactive Drugs*, Vol.37, No.2, pp. 193-201
- Barbosa et al. (2009) A six-month prospective evaluation of personality traits, psychiatric symptoms and quality of life in ayahuasca-naive subjects. *J Psychoactive Drugs NLM*, Vol.41, No.3, pp. 205-12
- Bouso et al. (2012) Personality, psychopathology, life attitudes and neuropsychological performance among ritual users of Ayahuasca: A longitudinal study. *PLoS One*, Vol.7, No.8, pp. e42421, 2012
- Bravo, G., & Grob, C., (1996) Psychedelics and transpersonal

- psychiatry, *Textbook of psychiatry and psychology*, Basic Books. (「幻覚剤とトランスパーソナル精神医学」バティスタ、チネン、スコットン編、安藤、池沢、是恒訳、『テキストトランスパーソナル心理学・精神医学』(第17章) 日本評論社、1999)
- 江崎真我、梅野充、五味湖隆志 (2010) 「催幻覚成分を含む植物由来物質：アヤワスカ (Ayahuasca) の単回使用により精神症状の再燃を来した中毒精神病の1例」精神医学 52 (8), 797-800
- 藤本晃記著 (2007) 『死者たちの物語「餓鬼事経」和訳と解説』 国書刊行会
- Gable, Robert S., (2007) Risk assessment of ritual use of oral dimethyltryptamine (DMT) and harmala alkaloids. *Addiction NLM*, Vol.102, No.1, pp. 24-34
- Grinspoon, L., & Bakalar, J.(1979) *Psychedelic drugs reconsidered*, N.Y.: Basic Books, Inc. (グリンスプーン、バカラール『サイケデリック・ドラッグ：向精神物質の科学と文化』 工作舎、2000)
- Grob, C. S. et al.(1996) Human psychopharmacology of hoasca, a plant hallucinogen used in ritual context in Brazil. *J Nerv Ment Dis NLM*, Vol.184, No.2, pp. 86-94
- Grob, C. S.(1999) The psychology of Ayahuasca, in Metzner, R. Ed. *Ayahuasca : Human consciousness and the spirits of nature*, Thunder's Mouth Press
- Grof, S. & Grof, C. Ed.(1989) *Spiritual emergency: When personal transformation becomes a crisis*. New York: Tarcher
- Grof, C. & Grof, S. (1990) *The stormy search for the self: A guide to personal growth through transformational crisis*. California: Jeremy P. Tarcher. (グロフ, C. & グロフ, S. 『魂の危機を越えて：自己発見と癒しの道』 安藤治・吉田豊訳、春秋社、1997)
- Halpern et al.(2008) Evidence of health and safety in American members of a religion who use a hallucinogenic sacrament. *Med Sci Monit NLM*, Vol.14, No.8, pp. SR15-22
- 蛭川立 (2011) 『精神の星座：内宇宙飛行士の迷走録』 サンガ
- Husserl, E.(1850) *Cartesianische Meditationen und Pariser Vortraege*, hrsg. S. Strasser (フッサール, E. 『現象学序説：デカルトの省察録』 山本万二郎訳、創文社、1954)
- 石川勇一 (2012) 「トランスパーソナル心理療法としての修験道：修行の心理過程と修験道療法」『日本トランスパーソナル心理学／精神医学』 Vol.12, No.2, pp. 49-72
- 石川勇一 (2013) 「アマゾン伝承療法の叡智と癒し：臨床心理学者による体験報告」財団法人パブリックヘルスリサーチセンターストレス科学研究所編 『Stress & Health Care』 No.207, pp. 5-7
- 石川勇一 (2014) 『スピリット・センタード・セラピー：瞑想意識による援助と悟り』 せせらぎ出版
- 石川勇一 (2015) 「トランスパーソナルと修行」諸富祥彦、日本トランスパーソナル学会編 『最新トランスパーソナル心理技法』 コスモス・ライブラリー
- 加藤清 (2002) 「精神拡張性ドラッグによる治療体験」 武井秀夫、中牧弘允編 『サイケデリックスト文化：臨床とフィールドから』 第一章, pp. 15-36, 春秋社
- Kjellgren et al.(2009) Experiences of encounters with ayahuasca "the vine of the soul," *J Psychoactive Drugs*, Vol.41, No.4, pp. 309-15
- Mabit, J., Giove, R., & Vega, J., (1995) Takiwasi: The use of Amazonian shamanism to rehabilitate drug addicts. *Yearbook Cross-Cultural Medicine* 6 : 257-85.
- 正木晃 (2002) 「サイケデリック体験と宗教体験のはざま」 武井秀夫、中牧弘允編 『サイケデリックスト文化：臨床とフィールドから』 pp. 283-292, 春秋社
- McKenna, T.(1992) *Food of the Gods: The search for the original tree of knowledge, A radical history of plants, drugs, and human evolution*, Bantam (マッケナ 『神々の糧』 小山田義文・中村功訳、第三書館、1993)
- 水野弘元 (2005) 『パーリ語辞典』 (増補改訂) 春秋社
- 水野弘元監修 (2013) 『アビダンマッタサンガハ：南方仏教哲学教義概説』 (新装版) 中山書房仏書林
- Moody, R. A. (1975) *Life after life: The investigation of a phenomenon—Survival of bodily death*. Mockingbird Book. (ムーディ, R. A. 『かいまみた死後の世界』 中山善之訳、評論社、1989)
- 長尾佳代子訳 (2005) 「愚者と賢者：癡慧地経」 中村元監修 『原始仏典第七巻中部経典IV』 春秋社
- 中牧弘允 (1992) 「はじめに液体ありき：ブラジルにおける幻覚宗教の創世記」『陶酔する文化』 (中牧編) 平凡社
- 中村元監修 (2005) 「出入息観：治意経」『原始仏典：中部経典IV』 (第七巻) 春秋社
- Ring, K. (1980) *Life at death : A scientific investigation of the near-death experience*. New York: Coward, McCann & Geoghegan. (リング, K. 『いまわのきわに見る死の世界』 中村定訳、講談社、1981)
- Silveira, D. et al. (2005) Ayahuasca in adolescence: a preliminary psychiatric assessment. *J Psychoactive Drugs NLM*, Vol.37, No.2, Page.129-33
- 寺澤芳雄編 (1997) 『英語語源辞典』 研究社
- Walsh, R.(1990) *The spirit of shamanism*, Los Angeles: Jeremy P. Tarcher, Inc. (ウォルシュ, R. 『シャーマニズムの精神人類学：癒しと超越のテクノロジー』 安藤治・高岡よし子訳、春秋社、1996)
- 山本 誠 (2012) 「ペルーアマゾン、アヤワスカツァーを

めぐって：観光化、商品化されるシャーマニズム』『四天王寺大学紀要』(54), 291-312, 2012

吉野安基良 (2011) 『グレートシャーマン：アマゾンからの祈り』たま出版

抄録

本研究では、第一にアマゾン・ネオ・シャーマニズムの外的概要とこれまでの心理学／精神医学的研究の展望を行い、第二には、ネオ・シャーマニズムの内的心理過程について、現象学的な事例検討を行い、初期仏教の視点からの検証を加えた。その結果、事例からは、深層心理の強烈な浄化体験、悪業の自覚、懺悔、自我の死と再生の過程、異界（餓鬼界と兜率天）体験、業と業果、縁起と無我の法の感得、多次元における法友（シャーマン、儀式的メンバー、神々、霊的鳥、精霊たち、ジャングル全体）との出会い、世界との一体感などの体験が明らかにされた。以上の事例研究と多くの先行研究とを総合すると、アマゾン・ネオ・シャーマニズムは、心の準備が十分に整った人々にとって、適切な宗教的環境が整っていれば、きわめて強力で豊かな心理療法的効果と霊的成長への効果をもつ、貴重な伝統であると結論できる。

Abstract

In this research, first, the review of a brief overview about Amazon neo shamanism and its psychological / psychiatric preceding research. Second, conducted a case study about the internal psychological process of the neo shamanism using phenomenological approach and further examined with perspective of early Buddhism approach. As a result, this case

study revealed that the Amazon neo shamanism ceremony can achieve experiences such as an intensive catharsis experience of depth mind, a self awareness of the evil deed, confessions from the heart, the process of death and rebirth, an experience to another world as Gaki-kai (Hungry ghost dimension, an extreme level of hunger and thirst) and Tosotsuten (one of the six deva-worlds)(Peta, Tusita), an awakening to the Law (Dhamma) of action and result (Kamma-Vipāka), profound realization of dependent origination (Paticcasamuppāda) and no self (Anatta), encountering admirable spiritual friends (Kalyāṇa-mitta) living in multi-dimensional worlds including shamans, other members of the ceremony, goddess, the spiritual bird, fairies and a whole jungle, and an appreciation to the sense of unity. Considering the case report above and from numbers of preceding studies, I conclude that the Amazon neo shamanism is a valuable tradition which has extremely strong psychotherapeutic effects and rich effects to spiritual growth, if an appropriate religious setting is regulated for whom their heart is well prepared.

Key Words: Amazon, Neo Shamanism, Ayahuasca, Phenomenology, Early Buddhism

謝辞

アマゾンおよびシャーマンの世界へと導いてくださったシャーマンである吉野安基良さん、海（ひかる）さん、ゼゴン、フェルナンド、その他の皆様、女神ジュラミダグンおよび精霊・自然霊たちに「真心からありがとう、あなたとみんな」と申し上げます。